

## 一、佛陀自證の法界

『華嚴經』は佛陀成道後、最初の説法と言われている。『經』の最初の會座「寂滅道場會」(舊譯は、その光景を如實に物語つてゐる。その内容は「世間淨眼品」と「盧舍那佛品」から成る。この二品に表現された佛陀の自證法界は、自然と人生とを背景としつつ、光明と音樂とによつて、象徴的にのみ説かれてゐる。われらの分別を超えて、寧ろ幻想的とも言い得るような廣大甚深の世界が、豊富にして流麗な言葉で示されてゐる。従つてそれは人間世界と隔絶した特殊な精神的世界を、象徴的に描出したかの感が深い。われらの現に見聞し經驗する分別世界とは異つて、佛の淨眼によつて開顯せられた世界であり、それが「蓮華藏莊嚴世界」と名づけられている。それは如來の境界であつて、無明業によつて成立している衆生世界を超えている。ただこの自證の世界は、畫かれた架空の世界ではない。稍々もすれば、廣大甚深の法界を説かれることによつて、われらは現實を忘れて幻惑されそうである。しかし『經』文はここで人間業と衆生世界を見失つていない。否、自證法界を説くことによつて、却つて現實の一般世界を獨特な見解の下に克明に説き明している。

## 二、衆生業の世界

佛の大智慧海中に於て、一切諸世界海、一切衆生海、法界業海、一切衆生欲樂諸根海等の現實世界が見出されると説かれてゐる。特に「盧舍那佛品」に於てそのことが明瞭にされてゐる。『華嚴經』はここで二世界を表わしている。一は佛自證の法界であり、他は衆生業の世界である。しかも衆生業の世界が依り所となりつつ、それがそのまま佛自證の法界に堪せられてゐることが注意せしめられる。ここに於てわれらは、衆生業の世界がこの『經』に於て、如何なる相に於て見出されてゐるか。その點に關心を向けることが必要となる。衆生業に依つて成立する世界とは、一應、われらの事實的世界である。この事實の世界が如何にして成立しているかについて、ここでは深く追求が爲されている。

## 三、世界海事

われらの事實世界は、世界海事として十種が擧げられてゐる。即ち、(一)説、(二)起具因縁、(三)住、(四)形、(五)形體、(六)莊嚴、(七)清淨、(八)如來出世、(九)劫、(十)壞方便の世界海である。この中、特に(二)起具因縁について、八因縁が説いてある。即ち、一、如來神力故、二、法應如來故、三、衆生行業故、四、一切菩薩應得上道故、五、普賢菩薩善根故、六、菩薩嚴淨佛土願行自在故、七、如來無上善根依果故、八、普賢菩薩自在願力故である。この八因縁こそ一切世界を成立せしむる根據となるもの

であるが、第三の衆生行業故こそ、われらの事實世界の形成される因縁である。事實世界の形成される因縁は種々なるも、直接的には衆生の行業に依るのである。單に世界が存在して衆生が在るのではなく、衆生の行業が世界を形成するのである。それ故に『經』には、「衆生心境 不可思議 業能悉起 一切刹海 衆生垢穢 國不清淨 行業無量 世界不同」と説かれ、衆生は行業無量の爲に、各々異つた世界を持つことが知らされる。その衆生の行業によつて異なる世界が、同時にまた菩薩の道場であり、如來の神力の故に成るとも言えるのである。

#### 四、世界海の種々形

また『經』には「一切諸業海 種々別異故」とか、「諸佛國土 起由心業 無量種形 而以莊嚴」と説かれてゐることは、衆生の業行が衆生世界の形を異にせしむることを教えるのである。世界海種々形とは、(一)方、(二)圓、(三)非方圓、(四)如水洄洑、(五)如華形、(六)種々衆生形等を擧げて、ここに業と世界との關係が、具體的に形の世界を持つことを明している。この中、第六の種々衆生形については、法藏が『探玄記』第三に特別の關心を向け、衆生形即世界であつて、第六は如種々衆生形と言われ理由を詳説している。そこには、佛身即國土身、國土身即衆生身というような説明も與えられ、法藏の思想が表われてもいるが、端的に種々衆生形が世界であることは着眼したことは卓見であり、『經』意を直ちに汲みとつたものと言へる。衆生形即世界という説は、われらの事實世界の最も具體的な理解の仕方

であると言つてよい。蓮華藏莊嚴世界というも、このような衆生業の世界と離れた世界ではない。衆生業世界海の事を轉じて開顯された如來の境界である。この『經』が佛自證の法界、蓮華藏世界を開顯し、表現することを面目としつつ、それと同時に、衆生の行業に由る世界の成立因縁を深く究めてゐることを重視すべきである。

#### 晩年の義門

多屋 賴俊

妙女寺義門わ天保十四年の八月十五日に五十八歳で亡くなつたのであるが、その天保十四年の二月から六ヶ月餘に渡つて旅行おし、歸つて來て八日目に亡くなつたのであつた。即ち二月十八日に自坊―若狹の小濱、妙女寺お出發し、京都へ出、それから讃岐(香川縣)の丸龜へ行き、次いで備中(岡山縣)の西部長尾、笠岡へ行き、岡山、姫路を経て六月下旬に大阪に着き、七月二日に京都まで歸つて來た。義門わこの旅行に出る前から病氣おしたのであるが、病お押しして旅に出たのであつた。そして途中に於いて度々重く患ひ、殆ど正氣お失うに至つたこともあつた。そして京都に着くと又重く病んで、もはや恢復の見込もなく、歩くこともできなくなつて、郷里から嫡子や親戚の者が迎えに來た。ところが義門わ、いま手お着けてゐる著述ができ上るまでお歸らない、と言つて、どうしても歸國し